

誰か私を見て」
コンプレックス
~ Look at me, someone ~
を克服しよう!

著 細雪美紅 (リリーナ)

2月6日収穫 『本質は違うところにある』

似非インテリなら、「きっと幼少時に母親の愛情が足りなかったせいだよ」などと言いそうだが、仮にそれが正解だと
して、今、母親に「いい子ねーよしよし」と甘やかされたからと言って、あなたの欲求は満たされないだろう。

問題は別なのだ。ランキング、閲覧数、ブックマ、お気に入り、DL数、etc...すべてにこだわって、それらが増加しな
いと怒り狂い、泣き叫び、嫉妬に溺れ、人生（あるいは一日から数週間）が破たんしてしまうところにあるのだ。「皆に
見てほしい、人に好かれたい、評価されたい」それが本質である。

これは、多かれ少なかれ、誰にでも本来備わっているものだが、ネットが普及して、本来一般人にはほとんど関係
なかった（※学校などの諸行事のランキングを除く）何千人～というレビュー&ランキングが浸透し、無意味な競争激化
の波にユーザーが巻き込まれたのが、（過度な欲求）発生のメカニズムである。

このコンプレックスが発生すると、やっかいである。Amazonに自分が投稿したレビューが「役立っていない」こと
さえ、「私はダメな人間なんだ」「なんで見てくれないのよ!」といった極端な思想に走らせ、自分を追いつめてしま
うからだ。

もっとひどい状況もある。解決策も、なくはない。が、今日はこれくらいにしておこう。
僕もあなたも、もっと楽に生きられる。あきらめちゃだめだ!

まず、自分の胸に問うてほしい。「私はランキング上位じゃなきゃいけないと思っ込んでいない？」と。

答えが「はい」とも「いいえ」だとも言い切れる人は少ないと思うが、「はい」と「わからない」の人に、もう一つ質問。

あなたは、ランキングをなんだと思っているだろうか？

自分がどれだけ注目されているかの証？

自分がどれだけ好かれているかの証？

自分がどれだけ優秀な人間かを知る指針？

いやいや、違っだろう。ランキングとは、統計である。スプーンのひとつである。

ある特定のグループに、何かを選択させた結果である。

「そうよ、だから私は選べないのよ。誰にも選べない。だから何よ」

まあ、そう拗ねずに聞いてほしい。

最初に特に説明しなかったが、これはブックログのパーや、FC2、SNSでの読者や友人の数など（以降、ブックログのパーとランキングのあるブログに限定する）無料のネット上のサービス（課金サービスは自由選択なので影響しない）での話である。商売や、リアルでの数字は含めていない。

「私はリアルでも（略）」

まあ、そうカリカリせずに。

はっきり言おう。ランキングが人生に影響を与えることはあるが、ランキングとは人が普通に、幸福に生きていく上では、はっきり言って不要なものなのだ。無関係ともいえる。

「嘘よ！（略）」

今まで頑張ってきた分、信じたくない気持ちは分かるが、事実である。真実である。真理である。理由はすでに述べている。まとめてみようか。

1 ランキングは無作為でも特定のグループでも、結局は「とある一部のグループ」が自由意思のもとで選択した結果である。

2 ランキングは、幸福や人間の価値とは、無関係である。人生に与える影響が必ずあるとは言えない。ゆえに必要なない。

確かに、僕も（経験したことはないが（苦笑））自分の書いた本がランキング上位にいたら飛び上がって喜ぶ。

しかし、喜び=幸福ではない。アランが言った。「幸福だから笑うのではない、笑うから幸福なのだ」と。

もし、ランキングが、全人類が、意味を100%知って、知恵を使い、誠実に、粛々と選んだ結果なのだとしたら。

その時は何か反省したり、喜んだりしてもいいかもしれないが、そんなことはありえない。

しよせん、ランキングに過度にこだわっている人は、企業の、ユーザーのモチベーションや競争を駆り立てようとする、ビジネスの仕掛けにハマったにすぎないのだ。きにすることはない。堂々とランク外を受け入れ、それよりも次の食事の献立や、趣味や週末の予定でも考えていた方がいい。

「ランキング最下位、ランキング外の人が、人として劣っているわけではない。なぜなら、すでにあなたは“生きる”という幸福に必須の条件を選んだ、素晴らしい人間なのだから」

2月7日収穫 『本当に好きならば、“書くこと”と“食うこと”は一緒にしない方がいい』

ブクログのpapierに限定した話をしよう。

書くことが好きだという人は、一度や二度、プロ作家になって稼ぎたいと思うだろう。

しかし、やめておいたほうがいい。今は昔と違うのだ。

今は分類はアマチュアでも、内容はプロ以上という人が、大勢ネット上で作品を公開している。それが可能な時代なのだ。あなたも今ここにいることで、それがよくわかるだろう。

「著作権はどうなるの？」と心配する方がおられるかもしれないが、出版社で著作を出版する場合、自費出版であっても、その会社の主義や規則にそぐわない場合、編集段階で内容の改定を求められる場合が多々ある。さらに、販売などの一部の著作権は会社側に帰属することになるので、自分で同人誌あるいはこのようなサイトで発表するよりもずっと不利なケースもある。一番わかりやすいのが、コピーや帯、表紙を自分では選択はできても自作できないことだろうか。「自分で、あるいはこの絵師さんに描いてほしい！」と思っても、商業的な理由で取り下げられる可能性は大である。

ネットから紙の書籍が生まれることが当たり前になり、さらに、スマートフォンやタブレット端末の普及により、電子書籍というものがだいぶ定着してきた今、自炊や違法コピー等諸問題はさておき、個人でこのように発表する方が、より自由で、さまざまな可能性があるのだ。

“書くこと”と、“食うこと”を一緒にしたい気持ちはよくわかる。しかし、それで人生を台無しにしてしまうのはあまりに残念である。新人賞に応募し、出版社に送信し、つれない返事をもらい、励みにはしても「いつまでこんなことが続くんだろう」と、見えない未来に絶望する。絶望している間に一体どれだけのことができるだろうか？もったいないではないか！

確かに、自宅警備員である頃や、書くことを仕事にしている人と比べれば、原稿に取り組める時間はだいぶ少なくなる。だが、その分執筆時間が濃縮され、いとおしくなることは間違いない。

本当に書くことが好きならば、新人賞への応募は自由だが、“書くこと”と“食うこと”を分けなさい。資格を取ったり、アルバイトなどで様々な経験を積み、自分の執筆に生きるだろう、これだという仕事を見つけなさい。起業するのもいいだろう（簡単かどうかは別として）。

そう、すべては執筆の栄養なのだ。体を動かすことで頭の働きもよくなる。

せっかくこのようなサイトがあるのだから、この際プロへの未練は捨て去り、執筆をライフワークにして、そして、これだという作品ができた時は、資金を投じて、ISBNのついた書籍にして、流通させる。売れなくてもいい。それでいいではないか。

あなたと同じ悩みで10年以上を苦しんだ僕は今、このサイトで作品を発表できて、幸福である。

※ここから先は、ブクログのパブで無料書籍を作った経験のある人、あるいはpixivでイラストなどを投稿した人に限定して話をする。あてはまらない方は参考程度に。もしくは、自分のブログのアクセス数やFBページのイイネなどに置き換えてみるのもよいだろう。

それまで人気のない人だけでの仲間の世界に、突然アルファブロガーや、プロ作家と繋がりがあったり、自身・閲覧数、DL数が桁違いという人が入ってくることはよくあることだ。あなたは嫉妬に駆られる人か？それともその出会いを嬉しがる人だろうか？

※嫉妬に駆られなかったという方は、ここから先を読み進める必要はない。

嫉妬に駆られるのはなぜか。自分がそうなりたいと願って努力しているのに、いつまでたっても、そうならないからだ。または、「じゃあ、私のこれまでやってきたことって無駄なの？」と怒り狂う。

閲覧数とは、見られることによる快感を得る、「悦覧数」である。高ければ高いほど、自分は注目されているのだと自己の欲求を満たされる仕組みになっている。

だがちょっと考えてみてほしい。本当に、すべての人は見られることによって快感や幸福を得るのだろうか？

たとえば、精神疾患にかかったMさんは、人が大勢いる場所に行くのが死ぬほど怖い。皆が自分を見ているんじゃないかと思うと、動悸がして吐き気を催し、気絶しそうになる。ひとりきりの部屋に帰ると、ほっとするそう。

また、孤独と独り遊びを好むAさんは、ネットでSNSページを作ったが、本当に自分の作品を理解してくれる、少数の人が集まることに、大変な満足感を得ている。片手指で足りる程度のフォロワーしかいないページに、「相互フォローお願いします！」とか、新規参入でフォローをする人(つまり知らない人)がやってくると、ことごとく解除しているらしい。

このようなケースもあると頭に入れておいてほしい。閲覧数は全てを量るためのものでもなく、また絶対ではないと。(閲覧数について・2に続く)

誰にも関心を持ってもらえない人生など、さびしいものだ。

だが、それでも、終わりまでその人が満足していたら、立派な人生である。

そもそも、「人を注視する」とは、どういうことだろうか？

「この人、どんな人なんだろう？」と関心を持つ。

「どういういきさつで、どういう肩書で、普段、何考えてるんだろう？」というのと同時に、「私と一緒にかなあ？」と比べてみる。

そう、人は比較するために自分を見、相手を見るのである。それが「関心のある注視」である。

何のために比較するのだろうか。

主には、仲間を求めているからである。（稀に、差別したいから、という理由の人間もいる）

本当に無関心な人は、これをしない。

さて、この「注視」だが、閲覧数に関係している。

何も深く考える必要などなく、チラ見でも、深読みでも、+1である。リピートでもう一つ+1。DLして閲覧する場所を変えたら（自分のデスクトップ等）それ以上は増えないので、ここで終わる。

「気にはなるんだけど、全部読む気はしないんだよねー（主には長いから）」

「なかなか時間がなくて」

「アカウント作るのに個人情報晒すの嫌だ」

e t c ...

一見開拓できそうな畑だが、実はこういう人たちこそ、+1をしない人たちである。

いわゆる積読とは違い、書店で言えば、チラ見した表紙と帯でスルーである。

こういう人は結構多くて、スルーについては深い理由など本当はなく、良書だろうが名著だろ

うが関係ないのだ。

だから、あなたの閲覧数が増えなくても、即・あなたの作品の出来がすこぶる悪い、という意味ではない。

まだまだ、電子書籍の歴史は始まったばかりなのである。

ところで、ご存知の通り、「売れたクソ本」と「売れなかった名著」があるように、本というものは普通の商品とは異なる性質を持っている。大体の作者は売れることを望んでいるわけだが、本とは本来、芸術・文化の領域にあるものである。金銭でその価値を量ることは難しいのだ。

それなのに、閲覧数「0」ならお気の毒と申し上げようもあるが、「私は1万ビューも行ってない！」とか、「上には上がいるのよ。ランキング一位になって絶対花咲かせてみせるわ」などと躍起になるお方が大変多い。（残念ながらそういう人たちはなぜか中くらいのランクにいるのがセオリーだが）

そういう人は、周りから「素晴らしい作品でした！」と2, 3人にコメントされると、それがすべての代弁のように思えてしまうのである。自分にはもっと上の待遇がふさわしいと勘違いをするのである。

ばかばかしい。

そういう人は、常に「ありもしない素晴らしい上位の破格の待遇」というのを夢見ているので、執筆する喜びや、発表する楽しさという本来の閲覧数の持つ意味を見失ってしまう...というより知らないのである。

「今日は閲覧数が100しか増えなかったわ。この間は300だったのに。なにがいけないのかしら？」

大丈夫。誰だって、何にだって、大体は、飽きるものなのだ。そして人間は、ある程度記憶すると原本をおろそかにする生き物でもあるのだから。

その人が著者の仲間でもない限り、「閲覧数を上げてやろう」などと注視して読むものでもないのである。

あるユーザーのサイトは、出だしから快調に人の目に触れる人気サイトになった。
あるユーザーのサイトは、どこで何度やっても、コメントすら付かないさびれたサイトだ。

人間性を疑うべきか。いや、技術を疑うべきか。

いや...それは運命なんだ。あきらめてくれ。

などと言われてあきらめの付く人などいない（口先ではなんと言おうと内心は怒り狂っている）。

だが、これだけは言うておこう。人気サイトを僻むだけ無駄である。専門家から言わせれば「ヒットする要因」はあるのだろうが、それだけでないことは、あなたもよく知っていることである。もしそれだけが真実ならば、みなアルファブロガーか何かになっているだろう...

コメントが欲しければ自分もコメントをたくさん残せ？（※これは大嘘。鬱陶しく思われることもあるので注意）

ツイートで拡散？（※思わぬ被害をもたらすこともある）

よく考えてほしい...。人間の数には限りがあるのだ。そのうち、あなたとその人気者とおそらく同じ日本、ちょっとした海外からの来訪者が、暇なとき何をするか。友達と遊びに行くか、引きこもるか。ひとりでカッコよくレストランにでも行くか。あなたなら、あなたの周りの人間なら、どうするだろうか？

多分、見知らぬ人のサイト（動画は性質が違うので除外）が面白そうだからといって、よほどのネット中毒でもない限り、リアルの方を大事にするだろう。極論を言えば食欲や睡眠欲など。

所詮、何度も言っているように、一部の話なのである。それも、ごく一部。

二次元でしか表現できない、ごく一部がどれだけ動いたかで、量られた「人気」など、何の意味があるか。

家族一人に愛してもらった方がよほどリア充である。

だからあんまり気にしなさんな。隣のあの人や100万ビューのちょっとした有名人になってしまっても、誰も訪れないあなたのサイトの良しあしを測ることなどできないのだ。測る奴がい

たら拒否ってしまえ。

大切なものは何かを思い出せばいい。あなたは芸能人でもなんでもなく、人気は義務でも使命でもなく、手のひらに乗る程度の人数を愛せば幸福になれる、非常に恵まれた人間なのだと。サイトはお遊び。商売ではない！

それを思い出せば、人気者への妬みなど、和らいでいくものだ。

ランキング、閲覧数、DL数、ブックマ数、コメント数。これらに100%縛られた創作活動など、なんと恐ろしいまでにつまらない事か！ここはルールにのっとって自由に本を出せる場所である。商売をしてもいいし、しなくてもいいのだ。在庫もなく、同人活動でもなく、赤字になる予期不安も悩みもない（関連ソフトを買った方、ご愁傷様）。

あれらに縛られるということは、芸能活動と同じである。「人気が価値であり全て」の世界。おぞましい！ひっそりと咲く野の花の孤独と美しさは、芸能界には理解できない美学である。むろん、アイドルを狂乱的に愛する人もいれば、物言わぬ山野草の魅力にとりつかれる人もいる。

さて、創作活動についてだが、やはりいるのが、「もしかして一発屋？それとも天賦の才能かなのかなの？」と思わせる人気者である。この人気者、あなたほど努力しているのかいないのか、残念ながら確かめることはできないのだが、センスと素養、運があるのは間違いないだろう。あるいは人脈。こういうものは本人が作り上げるものだとは言い切れないので（特に、どこにいても運命としか言いようがない共通点など）「今から作れ！」なんてことはまず無理である。（素養くらいは経験値としてこれから貯めようもあるが）

お金を出して広告する？それもアリだが、果たしてそこまでする必要はあるだろうか？筆者としては、それは最も自信のある作品に対しての最終兵器のように思われてならない。広告を出してもまだ「見てもらえない」なら、余計傷つくだろう。そもそも人はそんなに広告を見ない。ブログが2カラムか3カラムのどちらか気づかなかったときのように、ほとんどは一番の要件にだけ集中するからだ。

ここは、見てもらうのが目的ではなく、とりあえず、「ライフワークとして発表すること」が目的だと言い切ってみるのはどうだろうか。

さいの目のように変化するランキングや閲覧数をあてにするのではなく（※サイト自体の仕様で、自身の作品がどう扱われているかにも左右されるからだ）、まず自分の行動として評価する。完成したものをアップロードした、お疲れ様、と。作品を確認し、大きなミスで修正版を上げるなどの必要性はないと判断する。ツイートした、いいね！した。もうすることはない。では次の作品を。忙しい毎日を送るのである。

次にあなたがマイページを開くのは、堂々と新作をあげるときである。毎日、隙間から向こうを覗くように、「今日はいくら閲覧数が増えているんだろう。全然増えて無かったらどうしよう。怖いなあ」と思いながらマイページを開くよりは、ずっといいのではないのだろうか？

見てもらうために上げるのではなく、ライフワークだから上げる。ただそれだけの理由なら、閲覧数やランキングはそれほど気にならない要素で、むしろお菓子のおまけのような楽しみになる。それでいいではないか！それが本来である。

あなたは子供を有名人に産むために育てるのではなく、この世に出してやり、乾いた息をさせ、生きる喜びを分かち合うために産むのである。

「あ、私まだこんなランクにいる。こんなランクじゃだめ、もっと上をいかになくちゃ！ダメダメダメ！もっと頑張るのよ！」

はい、ご馳走さま。

単刀直入に言おう。「やめとけ」

ランキングとは何かとは（僕なりの考えを、ね）、初めの方で触れたので、あえて述べることはしないが、一体あなたは、これ以上、何を頑張るのだろうか？

もちろん、パラドックスで、「ランキングは大多数にとって“だいたい”正しい情報」である面も否定はしないが…。

単刀直入に言おう。「人の気まぐれな評価のために苦労するな」

もっと正確に言うと、「機械が計算してはじき出した数字なんかどうでもいい」

そんなことよりもっと内面を磨く努力をしなさい。ランキングは人格を破たんさせても、人生は満たさないのだから。

内面を磨くための投資なら、おおいに頑張って結構。こっちも応援し甲斐がある。背中を押すとか、見守りたくなるというものだ。これは一見損に見える結果をもたらしても、すべてが経験値で無駄がないので、得ばかりである。

一方、ランキングというのは、「ずっと1位」というのはないので、其れを死守するか、新たな1位を迎え撃つためにさらなる新商品やらマーケティングやら（中略）と努力しなければいけない。

言っておくが、それはビジネスの世界の話である。ビジネスの場合、リスクとリターンがある。趣味の場合、それはない。「あわよくばプロデビュー…あわよくば有名人…」という目論見があって努力したいのなら、無理をして引きとめはしないが。

しかし、せっかく特別なリスクのない自己表現をしているのに、あえてリスクを背負ってまでも、上位に食い込むため、見えない何かに挑もうというのはなんだか矛盾してはいないか？

結局のところ、他人が羨ましいだけではないか？

隣の花ほど赤いのは、多分気のせいだ。

ランクは上がるものではなく落ちるものである。山は上ったら下りるものである。山男、山女に帰化したいなら、もう何も言うまい…。高山病に気を付けて、そして『裸の王様』にならないように。

3月20日収穫『応援が欲しい人』

「あの人はいいなあ、ファンがいて、友達もいて、応援してもらえて。その上有料で高値でも1万冊以上も本買ってもらって。羨ましいなあ」

これは極端な例だが、誰でも一度は、「応援してもらいたい」と思うだろう。それも、できれば言葉や態度に表わしてほしい、と。それは咎めることのできない、ごく一般的な感情である。

応援とは、本物であれば、好意の表れの一つでもあり、社会的支援でもある。

得られる人、得られない人の差はなんだろうか。人徳？運？普段の行動？人づきあい？

確かにどれもその通りだ。

しかし、何もこれはあなただけの問題ではないのである。

どこで何をやっても、盛り上げようとしているのに、周りが物静かな人だらけという人もいるし、黙って見守っていてほしいのに、どこへ行ってもにぎやかで辟易して埋もれてしまう人もいる。

また、ネットでは理想通りでもリアルでは散々な人もいるし、リアルは充実していてもネットではそうではない人もいる。

...リアルについては省くが、ネットの場合は、文字、絵文字などの量や、文章の書き方、画像やサムネイル、投稿内容、頻度で様々な判断がされている。

その評価はフィーリングに近く、言い方は好ましくないが「相性」の良しあしの（当然、最初のそれは実際のものではない）判定に使われる。

わかりやすく言うと、「言い方が小難しい」「わかりやすい」「下ネタばかり」「政治の話ばかり」「芸能界の話ばかり」「自分の興味のないジャンルのオタク」などといったものがそれにあたる。

自分に合わない人には人はくっつこうとしないし、低レベルでためにならない情報ばかり発信している人にもくっつかない。

実際に会ったら、どんなに感じがよさそうで、話しやすい人でも、ネットでは関係ないのだ。

これは、人徳というより、もはや文章力や画力、話のセンスの問題である。

(※当然、関係を維持していくには、リアルで求められる要素と同じものが要求される)

そうやって初めは「偏見」によって集まった人間が、今、あなたの周りにはいるユーザーというわけだが、応援につなぐには、さらに試練が求められる。

そのユーザーが、ネット上で何をしたいか、どんなことを避けているかに左右されるのである。

「文章を考えるのは苦手」「なんか暇つぶし」という人は、「見るだけ」派だし、「積極的に情報を発信(受信)したい」という人は、大抵、桁違いの情報を求めるアクティブユーザーだ。

前者は水みみたいな関係でも気に入れば軽い気持ちで「いいね！」くらいはかろうじてするかもしれないが、後者は、求めるものがないと分かれば簡単に縁を切ることだって辞さない。しかも、黙って。

これではあなたにとって、いつまでたっても「応援者」はつかない。ユーザーの気分には振り回されて自分をころころ変えてしまっていては、人は離れていく一方である。

どうすればよいのか。

結論、応援なんて欲しがらな。

応援が欲しい気持ちは分かるが、なにか署名活動でもしているとかそういうものでない限り、応援はほとんど必要ないものである。自分さえしっかりしていればいいのだから。

自分のしっかりしている人を、人は自然に好む。

そこからまた自然と人が集まる。

無言の好意や、無言の応援だけかもしれないが、ぶれずに活動が続けていけば、いつか望む形でそれらを感じ取れる日が来るだろう。

まず、自分の表現したいことを確立しなさい。何の考えもなしに見切り発車してはダメだ(それ自体を探すのが目的なら構わないが)。

そして、そのための手段や方式を決めなさい。ブログでもいいし、電子書籍でもいいし、音楽やイラストでもいいだろう。

それから、活動を地味に続けなさい。花咲かないからと言ってあきらめずに(※「売りたい」という欲求については論外なので参考にしないでハウツー本でも買ってほしい)。

自分の信念が6割～9割ほど固まってくる頃には、あなたの周りにはそれなりに人が集まってくるのである。

肝心なのは、応援してもらいたいから活動するのではなく、応援してもらえるから活動する、でもなく、「活動したいから活動する」ことである。そうすることで、いつしか「そっちじゃなくて、こっち見て！」という際限なき無意味な欲求も薄まっていく。

3月24日収穫『隣の花は赤くない』

嫉妬の花は赤黒いが、本当は隣に咲いた花は赤くもなく白くもなく、あなたの知らない色で、隣から見たあなたの花もまた、その人の知らない色なのだ。だから互いにいとおいしいのである。

とりあえず、嫉妬を捨てることから始めようか。捨てるのは簡単だ。心のスイッチを切り替えよう。嫉妬を感じたら、心を、帰る時間の来た仕掛け時計みたいにしまいこむ。そして言い続ける。「あなたの出番はないの。自分が何を求めているか知りたいときにだけ、参考人としていらっしやい」と。

そして素直にいいことのあった人を褒めてみる。とりあえず上っ面だけでもいいから、褒めてみる。「羨ましいー」というのも、まあ、ありだ。おめでとう、ありがとう、などの言葉を忘れずに。

(時間がある人は嫉妬への冷酷な摘出オペでもしようか。心にメスを入れるのだ。3, 2, 1)

とりあえずでも嫉妬が無くなると、頭の中が涼やかで晴々してくる。チャンスだ、自分の道を探るのだ。

大事なものは、あなたの進むべき道がどんな風になるのか、である。獣道かもしれないし、誰か偉人を追従する道かもしれない。なんでもいい。

再び嫉妬が訪れても、同じことを繰り返して、やり過ごす。自分の劇的欲求がわかってくると不安や嫉妬の病巣は小さくなり、取り除きやすくなる。

とにかくこれは修行するしかない。叩き込むしかない。

自分に厳しく。

その内、「なぜあんなに羨ましいだけで何もしなかったんだろうか？愚かな」と過去を呆れて見つめる自分が現れて支配権を握るようになるものなのだ。

人間は何を言ったかでなく、何をしたかで測られる。

4月7日収穫『素直に喜ぶことも大切』

ここまで、「他人を羨むな」「ほしがるな」などということを書いてきたが、対称的だが忘れてはいけないこともある。

それは、「素直に喜ぶ態度」である。

限界までストイックになったところで、結局、人と人の付き合いの上では、どうしたって両極の答えが出てくるに違いない。「いい」「悪い」（この中には「ノーコメント」という選択肢もあるが気にすることはない）に振り回されるのは好ましくはないが、「いい」と言ってくれる人をあからさまに拒絶する必要もないのだ。

確かに、「いい」には恐ろしい魔力もある。過去に出会った人間の中で、とある怖い人間に出会った。それは、自作の漫画が、ある有名な漫画家さんにコンテストでダメ出しをされて没になったからといって

「妹も『すごく面白いね』って言ってくれたし、なんでこんなに酷評（※僕の知る限りおそらく普通かためになるコメントだろう）されるのかがわからない。妹もそう言っている。あの先生は頭がおかしいし、まともな漫画家じゃないって二人で文句を言った」

...ということを手平気で言う人物だった。一種の狂気すら感じるセリフである。

この人物は、例のように「悪い」を拡大解釈して、「いい」も拡大解釈して、視野が狭くてそのくせ色彩は大げさな世界に住んでいる人間だった。だから、「正しい」を「好意」でしか判断できなかった。自分に好意を抱いてくれる人は優しくして正しい。自分を否定する(どんなみみっちい拒否であっても)人は悪くてダメ人間と、常に選り分けていた。まあ...それがいいなら、悪いともいえないが、円満に生きていくためには少々世間知らずのお嬢様すぎる。

このように、人によっては「いい」が麻薬の様に作用する場合もあるので、注意はするに越したことはない。

しかし、やはり、「いい」と言ってもらえたことは素直に喜ぶべきである。長点を見つけてもらったのだから。あるいは友好的な態度。ノリにのっておいてもいいのである。問題は、それを過剰に意識しないことと、「付点」を付けないことと、高みを目指したいなら「いい」に溺れないで客観的に自分を見つめることの三つである。

「良いね」「ありがとうございます！でも自分はまだまだです！これを励みに頑張らせていただきます！」

それが、本来理想とする、「いい」の素直な受け取り方である。

「誰か、私を見て」コンプレックス~Look at me, someone~を克服しよう

<http://p.booklog.jp/book/43952>

著者：細雪美紅（リリーナ）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sasameyuki39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43952>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43952>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.